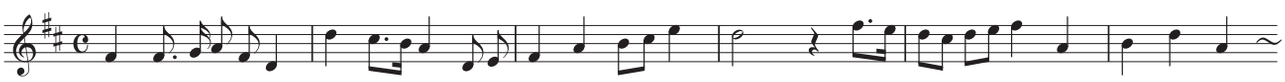
最初期の草稿からみる、駒澤大学校歌創作の変遷

久松義恭（一般社団法人 日本楽劇協会 理事）

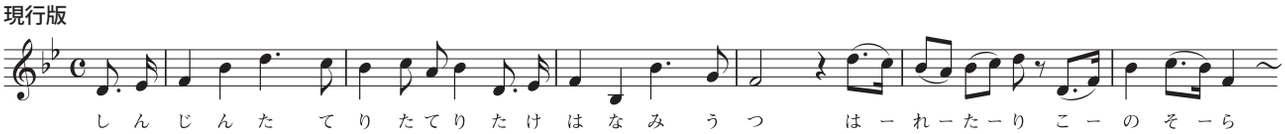
山田耕筰の駒澤大学校歌創作は、北原白秋の自筆歌詞原稿の余白に書き込まれたスケッチから始まった。おそらく詩を読んだ瞬間に浮かんだフレーズを素速く書き留めたものであろう。しかしながらここに見られる草稿は現在歌われている現行版とは調性も含めてかなり異なっており、とりわけ前半部分は詩に対して全く違うアプローチが成されている（**譜例１**）。また、速筆の山田としては珍しく、最初のアイデアを破棄して別のフレーズを試みるなど（原資料参照）、前半部分にはかなり苦心した痕跡が認められる。その一方で、後半の「捉えよ輝くこの現実〜」（草稿の 17 小節目）以降については、拍節の違いはあるものの、現行版とほぼ同じアイデアが書き留められている（**譜例２**）。

譜例１：校歌冒頭部分の比較

草稿（北原白秋の自筆原稿に書き込まれたスケッチ）

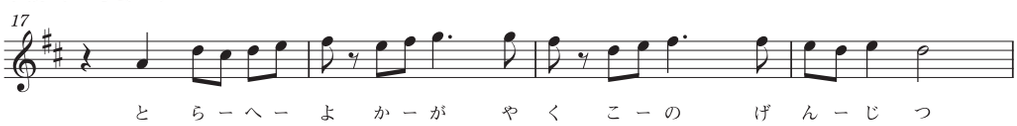


現行版

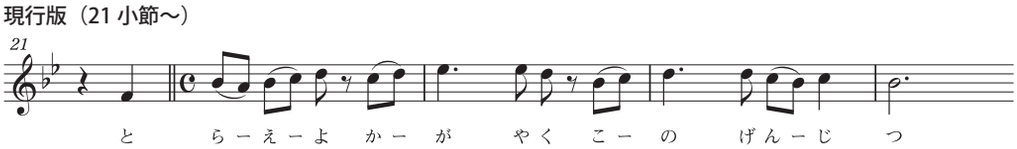


譜例２：校歌後半部分の比較

草稿（17 小節〜）



現行版（21 小節〜）

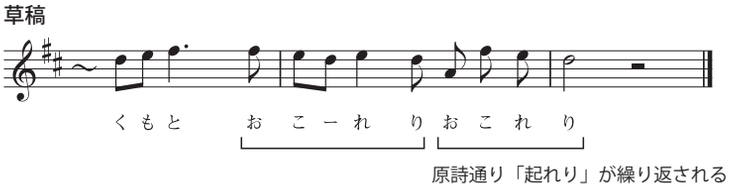


最後の一行「我らの校旗は雲と起れり」は、もとの詩では更に「起れり」が繰り返されることになっており、白秋は改段して「起れり」のみに一行をあてている。

また、詩に添付された白秋のメモには『各連最後の一行「起れり〈の如き〉」は作曲の都合にて「雲と起れり〈の如く〉」にてもよろしく』とあり、なんらかのリフレインを用いて締めることを想定し、山田に提案しているように思われる。しかし山田はメモにあった「如き」は採用せず、原詩に忠実に「起れり」のリフレインのみを採用してまずはスケッチを書き留めた（**譜例３**）。

譜例３：原詩「起れり」リフレインの処理

草稿

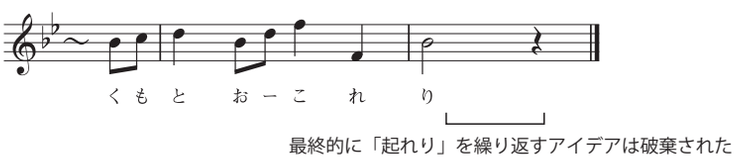


しかしながら原詩の手稿を精査すると「起れり」のリフレインは鉛筆による斜線で抹消されている。この抹消は白秋ではなく、山田によるものと思われる。

山田は最初に手がけたこの草稿の他に決定稿までに更に２種の草稿を作成しているが、そのどちらに於いても最終段の「起れり」「動けり」「光れり」のリフレインは採用していない。文字の語呂がメロディーにうまく乗らなかったのか、流麗な歌詞の流れにおいて、最後の１センテンスだけを繰り返すことに違和感を感じたのかは不明だが、「作曲の都合」によってリフレインそのものが削除されることになった（**譜例４**）。超一流の詩人と作曲家による鋭い感性のせめぎ合いが、この小さなスケッチの中に見て取れる。

譜例４：原詩「起れり」リフレインの処理２

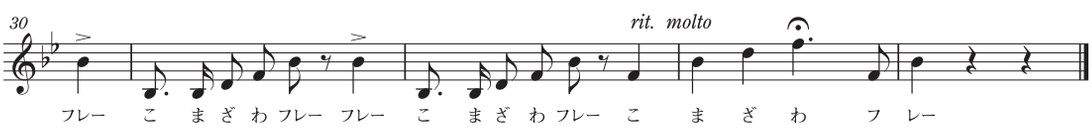
現行版



抹消された「起れり」の詩

また、メモでは『各連の復唱としての「フレー駒澤」は山田氏によろしく一任す』として、原詩にはこのくだりはない。 「フレー駒澤フレー、フレー…」のフレーズ（**譜例５**）はピアノ伴奏つきの手稿が書かれた際に初めて登場するが、この部分のアイデアは山田からの発案であったのではないかと推測される。

譜例５

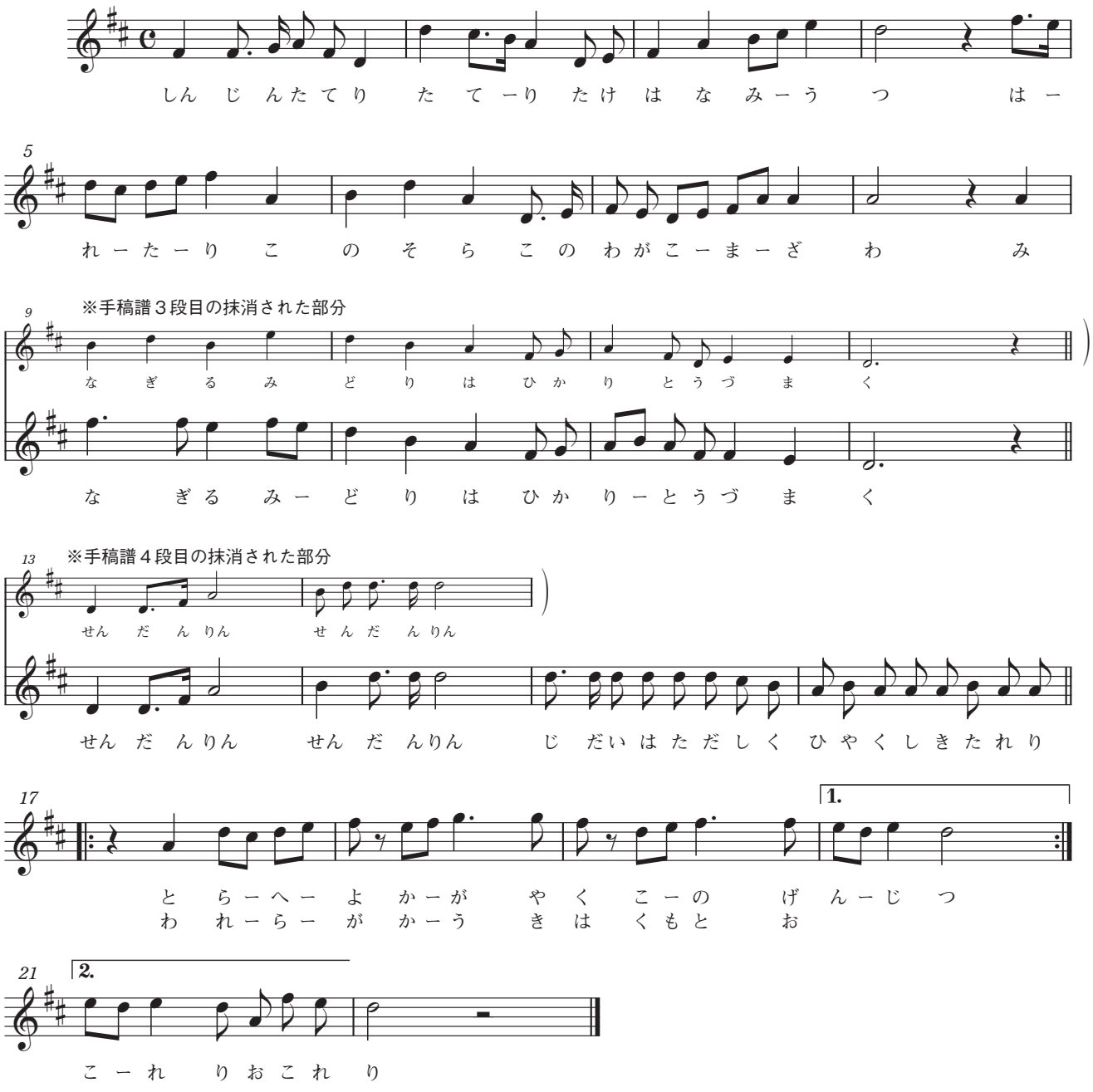


山田はちょうど10年前の1920年に作曲した明治大学の校歌に於いて大学側に同様の提案を行い、児玉花外の原詩にはなかった「フレー、フレー、明治」のリフレインを自ら足しているのである。校歌が運動競技の応援歌を兼ねることが多かったことを見越しての補筆であろう。

駒澤大学校歌制作の話を受けた際に、山田が「それならば応援歌の側面も持たせるために最後にこうしたリフレインを追加したらどうか？」と提案したものの、白秋は作詩を終えた段階ではそのアイデアは具体化せず、「山田に一任する」とメモを認めたのではないだろうか。

現在残されている伴奏譜の手稿を見ると、山田も一旦歌詞全体の作曲を終えた後に、追加を挿入するように「フレー、フレー～」の部分を書き込んでいる。この部分を精査すると、「フレー、フレー～」の部分は前半と較べて明らかに筆跡に差があり、ラフスケッチに近い書き方がされている。更にピアノ伴奏も付けられていないことを見ると、山田自身にも逡巡するところがあったのだろうか。現在この部分は省略されて歌われており、「フレー、フレー～」の痕跡は、戦前に刊行された２種の出版譜（「山田耕筰全集 7 国民歌謡曲集」、「世界音楽全集35学校唱歌集」：ともに春秋社刊）、さらに1973年刊行の「日本校歌・寮歌集」掲載の旋律譜に認められるのみである。

山田と白秋は同じ年のうちに駒澤大学のために応援歌も手がけおり、応援歌の制作が決まったために、校歌を代用する必要がなくなり、最終的にこの部分が姿を消したのかもしれない。

駒澤大学校歌

北原白秋の歌詞原稿に書き込まれた、山田耕筰のスケッチを復元